

熊本学園大学産業経営研究第 25 号抜刷

2006 年 3 月発行

熊本・九州の産業遺産をめぐる動向と課題

幸 田 亮 一

熊 本 学 園 大 学

産 業 経 営 研 究 所

熊本・九州の産業遺産をめぐる動向と課題

幸田 亮一

1 はじめに

産業遺産 (industrial heritage) への関心が高まっている。関連する書籍の出版が相次いでいるだけでなく、雑誌や新聞で取り上げられることも多くなった。

とくに、最近では世界遺産ブームとの関連で、世界各地の素晴らしい産業遺産が紹介されるようになったことに刺激を受け、日本各地で地域活性化の核として産業遺産を世界遺産にしようとの動きが広がっている。

いま、産業遺産をめぐるどのようなことが起きているのか、九州・熊本ではどのような動きがみられるのか、産業遺産はどんな可能性を有するのか、これらの問題について、世界や日本での様々な動向を整理した上で、熊本・九州の産業遺産の活用可能性を探るとともに課題を整理することが本稿の課題である。

なお、一般的には産業遺産とは産業革命以降に産業活動の結果として残されたものの中で歴史的に価値ある文化財を指すが、本稿では必要に応じ教育や文化関係の遺産も入れて広義に解

釈し、近代化遺産と重ねて用いることもあることを最初に断っておきたい。

2 高まる関心

出版物

日本の産業考古学会はイギリスより約20年ほど後れて1970年代に誕生しているが、産業遺産への関心が急速に高まったのは90年代に入ってからである。産業考古学会による出版物に加え、各種の本や写真集が出版されるようになり、月刊誌での特集も相次ぐようになった¹⁾。新聞でも、例えば「技術遺産を訪ねる」というシリーズを日本経済新聞が2005年4月より毎週日曜日に連載中である。

国レベルでは、文化財保護審議会の下に設置された文化財保護企画特別委員会が1994年7月に「時代の変化に対応した文化財保護施策の改善充実について」を出して近代化遺産の早急な調査と保存の必要性を指摘している²⁾。この結果、「近代の文化遺産の保存・活用に関する調査研究協力者会議」が同年9月に設置され、

1) 主なものだけでも以下の様な月刊誌の特集がある。『太陽』「特集：産業遺産の旅」No. 469, 1999年11月、『別冊歴史読本 近代を創った77人 近代化遺産とパイオニア』新人物往来社, 2001年、『男の隠れ家』「身近な異空間 日本の近代化遺産」2003年6月号、『日経地域情報』「特集 産業観光“離陸”の条件」No. 431号, 2004年1月、『るるぶ情報版 中部50』「産業観光に行こう」2005年2月、『文化庁月報』「特集：THE・近代化遺産」No. 444, 2005年9月号。

2) この報告書の中に次のような指摘がある。「国は、文化財のうち学術的な調査、研究による歴史的な評価が確定した重要なものから指定しており、現在、近代に属する文化財で指定の検討対象としているものは、たとえば美術工芸品のうち絵画が昭和初期、建造物は大正末、史跡は明治初期までのものとなっている。今後、調査、研究をさらに進め、近代の文化遺産の指定促進をはかる必要がある」(東京国立文化財研究所 [1999], 13頁)。

その分科会の報告をもとに、2年後の96年7月に「近代の文化遺産の保存と活用について」がまとめられるとともに、「登録有形文化財」がスタートした。

同じ時期に、文化庁の指導を受けて各県で近代化遺産調査が行われ、多くの都道府県がすでに調査を終え報告書を出している。さらに文化庁以外にも農林水産省や経済産業省、国土交通省も産業遺産へ関心を示し、整備に力をいれつつある。「日本の棚田百選」³⁾や「日本の疎水百選」などはその一環として捉えることができる。

九州における調査・研究動向を大づかみに整理してみると、各県別の近代化遺産調査に関しては、宮崎県を除いてすでに調査が終わり報告書が出ている⁴⁾。さらに、大牟田や北九州、鹿児島などで、主要な産業遺産についての報告書が出されている。また、産業史と歴史的景観の関係を取り扱った木元富夫氏の研究では北部九州の産業遺産のことを詳しくとりあげている。

最近の注目すべき動きは、県や地域を単位とした一般向け書籍が相次いで登場し始めたことである。先陣を切ったのは、2005年4月の『軍艦島の遺産』で、それに続いて『かごしま近代化遺産』が同年10月に出た。北九州でも今秋をめどに出版計画が進んでいると聞いている。また、観光資源という点から産業遺産を捉えた出版物として、2003年版の『九州経済白書』をあげることができる。その特集は「新しい観光・集客戦略」で、各地のヘリテージツーリズムの動向を詳しく紹介している。さらに、国土交通省九州運輸局が砂田光紀氏に委託してまとめた『九州遺産』は大きな反響を呼び、九州にはこれほど多くの素晴らしい産業遺産があったのかと改めて多くの人々が気づききっかけとなった。最初は非売品であったが、すぐに一般書として書店で販売されるようになり、予想以

上の人気を博しているのも、潜在的関心の高さを示したものと見えよう。

保存運動の進展

関心を寄せているのはマスコミや自治体だけではない。むしろ、これらに影響を及ぼしたのは地域の市民運動であった。全国的には、東京、神奈川、愛知、北海道、九州などで活発な運動が始まったのであるが、ここでは九州での動きの概要を紹介しよう。

九州での産業考古学研究は、朝倉重連水車群の保存運動に携わっていた香月徳男氏らによって始まっていたが、組織化については、1987年に飯塚で産業考古学会全国大会が開催されたのをきっかけに準備が進み、1989年に桑原三郎氏を会長にして九州産業考古学会が設立された⁵⁾。

当初から大牟田の関係者は熱心で、1992年には九州産業考古学会の総会・見学会を開き、翌年の産業考古学会全国大会を成功させている。このことは、三池炭鉱関連の施設が決して単なる遺物ではなく遺産であるとの認識を大牟田市民や関係者に広げるのに大きく貢献した。これがきっかけとなり、1997年2月には「三池炭鉱関連施設の保存・活用に向けて(提言)」が産業考古学会より出され、その後の、同炭鉱関連施設の保存に大きな役割を果たした。熱心な市役所職員の活動もあってその後も大牟田市は、1999年には「産業遺産国際シンポジウム」を開催するなど、産業遺産を活かした街づくりに積極的に取り組んできている。2004年7月には近代化遺産活用協議会が大牟田で開催されている。このような動きを踏まえ、三池炭鉱の産業遺産活を活用するための活発な市民運動が広がり、いまではNPO法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブがシンポジウムを開いたり、

3) 青柳 [2002] を参照。熊本では水俣の寒川地区棚田が取り上げられている。

4) 参考文献一覧を参照。

5) 九州産業考古学会の設立経緯については、木元 [2004]、171 頁を参照。

修学旅行のガイドをしたりしてまちづくりに貢献している。

同様の活発な動きは、1974年の閉山後に無人島となって放置されてきた長崎県の端島に関してもみられ、NPO法人が組織され長崎市民だけでなく全国から関心と呼び保存・活用活動を精力的に展開中で、自治体も観光資源としての可能性に注目するに至っている。

福岡県の志免町でも志免炭鉱立坑櫓保存のための住民組織が生まれ、2005年6月には日本産業技術史学会第21回年会講演会(志免大会)を開催し、保存への弾みをつけた。

これらを含め九州各地にいま、産業遺産を保存・活用するためのNPOが相次いで生まれているが、その主なものは以下のとおりである。

- ・NPO 法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ
- ・NPO 軍艦島を世界遺産にする会
- ・志免立坑櫓を活かす住民の会
- ・NPO かごしま探検の会
- ・NPO 北九州 COSMOS クラブ

なお、これらのNPOの間で、いま九州ネットワークを作る計画が進んでいるところである。

熊本の動き

熊本において近代化遺産への関心を高めたいきっかけは、熊本まちなみトラストによる近代建築の保存活動であろう。

同トラスト誕生のきっかけは熊本市のある歴史的建造物が解体の危機に瀕したことであった。すなわち、1919年建造の旧第一銀行熊本支店は西村好時により設計され清水組により施工された建物であったが、1997年にマンション建設のために取り壊されることになった。それを聞き何とか残したいとの強い思いを抱く建築家や事業主たちが集まり熊本まちなみトラストを作り、同建築物の買い手を探し、保存・活用の道を探ったのである。この時は土壇場で買い手が見つかり、空調機器メーカーのピーエス株式会社のオフィスとして見事に再生され、第12回BELCA賞ベストリフォーム部門表彰を受

けている。同トラストは、さらに旧第一勧業銀行熊本支店の保存運動、旧熊本紡績工場の保存運動、さらに2004年からはJR上熊本駅舎の保存運動と精力的に活動を続けてきている。

また、旧熊本紡績の保存運動をきっかけに2003年3月には熊本産業遺産研究会が発足し、産業考古学会の熊本支部の役割を兼ねつつ、今日まで3年間に、「なつかしきSL時代の熊本駅・上熊本駅をたずねて」(2003年7月6日)、「八代周辺の産業遺産を訪ねて」(同年11月24日)、「集成館の調査事業について(長谷川雅康氏)」(2004年9月23日)、「浜田醤油(株)の建物・機械を訪ねて」(2005年3月12日)、「肥薩線に残る鉄道遺産見学会」(同年8月21日)、「産業遺産のおもしろさ(川上顕治郎氏)」(同年9月24日)、「大築島の調査・見学会」(同年10月29日)などを開いてきて、徐々に参加者が増えている。

このような動きもあって、最近では熊本の経済界やマスコミも産業遺産に関心を持つようになってきた。

まず、熊本経済同友会観光部会は、2004年7月23日に「産業遺産観光」をテーマに講演会を開き、富士川一裕氏(熊本まちなみトラスト事務局長)と筆者が呼ばれてプレゼンテーションを行った。熊本のマスコミでもこの間、産業遺産が取り上げられる機会が増えた。筆者自身が関わった分でも、肥後学講座の一環として「肥後の産業遺産」に関連する映像が2004年12月1日夕方に熊本放送で紹介された。また、NHK熊本放送局の「ひのくにYOU」の2005年1月26日に出演し、産業遺産の面白さ可能性をアピールした。

この他、学術的な研究発表も開催された。すなわち、2005年10月20日(木)に地全協(地域研究機関全国協議会)の平成17年度研究発表会が熊本学園大学産業経営研究所で開催され、庄谷邦幸氏(大阪市立公文書館長・桃山学院大学名誉教授)による「地域再生と産業観光」というテーマでの報告があった。そこでは、国際

産業遺産保存会議 (TICCIH) の最近の動きが紹介された後、「産業観光」の可能性について大阪経済圏を事例に説明された。

3 産業遺産をめぐる動き

ここでは、産業遺産をめぐる近年の動きを世界・日本・九州に分けて整理しておく。

世界

まず、産業遺産に対する世界的な関心の高まりである。1972年のユネスコ総会で世界遺産条約が採択され、自然遺産と文化遺産の中で世界的価値を有するものが世界遺産に登録されるようになり、欧米を中心に、産業活動の足跡を示す文化財が世界遺産に認定されるようになってきた。2006年1月現在で世界遺産は812で内訳は、自然遺産160、文化遺産628、複合遺産24となっている。うち、日本は、それぞれ3、10、0という状況で、条約ができて20年後にようやく批准したという遅れが登録数の少なさという結果をもたらしている。

これまで世界遺産に認定されたヨーロッパの産業遺産は以下のとおりである⁶⁾。なお、カッコは国名・認定年である。

- ・ヴィエリチカ岩塩坑 Wieliczka Salt Mine (ポーランド・1978年)
- ・アルケスナンの王立製塩所 Royal Saltworks of Arc-et-Senans (フランス・1982年)
- ・アイアンブリッジ峡谷 Ironbridge Gorge (イギリス・1986年)
- ・ランメルスベルク旧鉱山と古都ゴスラー Mines of Rammelsberg and Historic Town of Goslar (ドイツ・1992年)
- ・エンゲルスベリの製鉄所 Engelsberg Ironworks (スウェーデン・1993年)
- ・フェルクリングゲン製鉄所 Voelklingen Ironworks (ドイツ・1994年)
- ・クレスピ・ダッダ Crespi d'Adda (イタリア・1995年)

- ・ヴェルラ製材製紙工場 Velra Groundwood and Board Mill (フィンランド・1996年)
- ・キンデルダイク - エルスハウトの風車群 Mill Network at Kinderdijk-Elshout (オランダ・1997年)
- ・ゼメリング鉄道 Semmering Railway (オーストリア・1998年)
- ・中央運河にかかる4閘門 The Four Lifts on the Canal du Centre and their Environs (ベルギー・1998年)
- ・D.F. ウォーダ蒸気揚水ポンプ場 D.F. Wouda Steam Pumping Station (オランダ・1998年)
- ・サン・テミリオン地域 The Jurisdiction of Saint-Emilion (フランス・1999年)
- ・ベームステル干拓地 Beemester Polder (オランダ・1999年)
- ・エーランド島南部の農業景観 The Agricultural Landscape of Southern Oland (スウェーデン・2000年)
- ・ブレナヴォンの産業景観 Blaenavon Industrial Landscape (イギリス・2000年)
- ・ソルテア Saltaire (イギリス・2001年)
- ・ダーウエント峡谷の工場群 Derwent Valley Mills (イギリス・2001年)
- ・ニュー・ラナーク New Lanark (イギリス・2001年)
- ・エッセンのツォルフェライン炭坑産業遺産群 The Zollverein Coal Mine Industrial Complex in Essen (ドイツ・2001年)
- ・アルト・ドウロのワイン産地 Alto Douro Wine Region (ポルトガル・2001年)
- ・ファールンの大銅山地域 Mining Area of the Great Copper Mountain in Falun (スウェーデン・2001年)
- ・トカイ・ワイン地方の歴史的文化的景観 Tokaj Wine Region Historic Cultural Landscape (2002年・ハンガリー)
- ・リヴァプール海岸の商都 Liverpool-Maritime Mercantile City (イギリス・2004年)
- ・ヴァールベリの無線局 Valberg Radio Station (スウェーデン・2004年)
- ・ピコ島のブドウ園文化景観 Landscape of the Pico Island Vineyard Culture (ポルトガル・2004年)

6) 古田 [2005] を参照。

これらのリストから、18～19世紀の産業革命期の鉱工業遺産が中心であること、近年はそれに加え第一次産業の産業遺産の認定が増加していること、まとまった地域を単位として認定されていることなどがわかる。ヨーロッパ以外で世界遺産に認定された産業遺産はまだ少なく、アジアでは中国の青城山と都江堰の灌漑施設 (Mount Qincheng and the Dujiangyan Irrigation System : 2000年) やフィリピンのコルディエラ棚田 (Rice Terraces of the Philippine Cordilleras : 1995年)、ダージリン・ヒマラヤ鉄道 (Darjeeling Himalayan Railway : 1999年) くらいである。

ユネスコの世界遺産認定にあたって重要な役割を果たすのが ICOMOS (International Council on Monuments and Sites : 国際記念物遺跡会議) で、この ICOMOS の諮問委員会の役割を果たし、産業遺産の世界遺産認定に大きな影響力を有するのが TICCIH (The International Committee for the Conservation of the Industrial Heritage : 国際産業遺産保存会議) である。TICCIH は4年に一度の総会を開き、その間に一度の中間会議を開いている。2003年7月にロシア共和国ウラルの都市、ニジネータギルで開催された TICCIH 総会で「産業遺産ニジネータギル憲章」が制定されたが、この憲章は、最終的にはユネスコの承認を受けて、産業遺産保存に関する国際的な基準となる重要な文書である⁷⁾。

日本

次に、日本でも産業遺産への関心が高まり、各地で新しい取り組みが行われていることをあげることができる。ユネスコ世界遺産条約のわが国での批准は遅れたが、世界遺産への民間レベルでの関心は高く、近年の世界遺産ブームもあって、日本各地で産業遺産を活かしたまちづ

くりや世界遺産登録運動が始まっている。いま日本でもっとも世界遺産指定の可能性が高いのは石見銀山である。政府は、2005年9月15日に開いた会議 (世界遺産条約関係省庁連絡会議) で、島根県の石見銀山遺跡をユネスコ世界遺産に推薦することを正式に決定した。2006年1月にユネスコ世界遺産センターに推薦書を提出する予定で、世界遺産リストに記載されるかどうかは、2007年7月ごろの世界遺産委員会で決まるとのことである。この他にも、2005年に富岡製糸場がそれまでの所有者、片倉工業から富岡市へ譲渡され、市や県をあげて世界遺産登録のための準備を始めたことも注目すべき動きである。

既述のように、文化庁を中心とする国・自治体による調査・研究の進展も加えることができるが、なんといっても、地道ながらこつこつと活動を続けてきた全国レベルの産業考古学会と各地の関連学会・研究会の努力を忘れてはならないであろう。

2005年7月には名古屋で愛知万博にあわせて、TICCIH 中間会議が開かれた。これは欧米以外では最初の会議として大きな意味を持つものであり、欧米とアジアの研究者・活動家の連帯を大きく前進させる会議であった。そのことは、会議後に TICCIH のスミス事務局長から送られてきた以下の言葉に端的に集約されている。すなわち「今回の名古屋の会議は素晴らしい成功でありました。参加した西欧諸国の人々の目に、日本が多数の産業遺産を大切に保存していることを認識させるとともに、世界の産業遺産地図に日本は確固たる地位を築かれたと信じます」⁸⁾。

05年度の産業考古学会の取り組みとしてさらに注目すべきは、日本経済新聞社と共同して開催した「産業遺産ウォーク」が好評を博したことであった。「NIKKEI 産業遺産シンポジウ

7) ニジネータギル憲章の全文の仮訳は、『産業考古学』110号 [2003] に掲載されている。

8) 『産業考古学』117号 [2005]、9頁。

ム」(3月24日大手町日経ホール)の後、NIKKEI 産業遺産ウォーキング大会は、4月9日から7月23日まで8回にわたって開催され、いずれも大好評であった。これは、同新聞社が産業遺産への関心を示したということと、多くの人々が産業遺産を見て感動したということで大きな意味のあるイベントであった。

いま、景観という言葉が都市計画や農村再生、観光事業などで盛んに用いられるようになってきているが、そのルーツを探ると風土という言葉にいきつく。人間社会を時間性と空間性という二重の運動により捉え、「人間存在の空間的・時間的構造は風土性・歴史性として己を現してくる。時間と空間の相即不離が歴史と風土との相即不離の根底である」として、風土の重要性を主張したのが和辻哲郎である⁹⁾。

だが、近代技術優先の高度成長期には和辻はほとんど忘れ去られた感があった。高度成長の反省を踏まえ、あらためて景観の重要性について世間に広く知らしめた第一人者は中村良夫氏であろう。氏は、「風景論は、むしろ思想上でも、工学技術、行政技術の点からも、地域主義に行きつくべき性格を持っている。地域の文化的円熟と平安こそ、その本来の目的であろう¹⁰⁾」と述べている。ここでの風景という言葉は景観という言葉に置き換えてよい。

都市景観については建築家や都市計画専門家による本が多く出ているが、農村景観については本は少ない¹¹⁾。その中で、日本の国土は太古からの日本人の営為によって作られてきたものだとして主張してきたのが富山和子氏である¹²⁾。氏の主張を踏まえれば、治水施設だけでなく、棚田を含む水田や、杉・桧の植林も産業遺産と言える。また、河川を中心とした景

観に関して伝統的治水技術の復権を主張しているのが大熊孝氏である¹³⁾。

行政による景観認識の一大変化は、2004年の文化財保護法の改正である。ここで、従来の有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物、伝統的建造物群という5分野に30年ぶりに文化的景観が加わった。こうして、2005年に「景観法」が施行されたのである。これ以降、風景美の認識が大きく変わりつつある。都市や農村の産業遺産を含む景観も文化財との認識が広まってきている。

実は、文化的景観(cultural landscape)という概念は、世界遺産の登録基準として1992年に新たに付け加えられた概念である。それは、「自然環境の特色と限度を考慮に入れながら、自然との微妙かつ特殊な関係を構築しているもの」であり、以下の3つに分類できる¹⁴⁾。

- a 「人間によって意図的につくられた」景観・・・庭園や公園
- b 「変化性のある」景観・・・フィリピンの棚田など
- c 「結合的な文化」的景観・・・ピレネー山脈など

世界遺産に値する景観がいくつも存在する日本は、今後もっと文化的景観という観点を重視して地域振興を図るべきではないだろうか。

九州

さらに、動き始めた九州の産業遺産活用についていくつかの事例をとりあげたい。

まず、これまでも活発な取り組みを行ってきたところがさらに新しい試みを始めた事例として、鹿児島島の集成館事業のリノベーションが注目している。2004年の九州新幹線の部分開業

9) 和辻 [1979], 19頁。

10) 中村 [1982], 230頁。

11) 経済学者として鋭い問題提起を行っているのが、松原隆一郎 [2002] である。

12) 富山 [1974], 富山 [1993], 富山 [2005] を参照。

13) 大熊 [2004] を参照。

14) オドルリ他 [2005], 58-60頁を参照。

により鹿児島駅周辺再開発を含め変化が見られる鹿児島において、島津興業(株)は、反射炉のレーダー探索などを用いた学術研究も取り入れつつ、集成館の再開発を行い、05年11月にリニューアルオープンさせて、観光客の増加を図っている。鹿児島は一大ブームになっている焼酎ブームの追い風を受けて、各地の焼酎蔵が醸造過程や醸造施設を観光客向けに公開しており、これと集成館事業のリニューアルがうまくかみあって鹿児島の産業観光は活況を呈し始めている。さらに、鹿児島県の新しい取り組みとして付け加えるべきは、大口市にある旧曾木発電所遺構が観光資源として「発見」され、国土交通省の支援も受け、急速に整備事業が進んでいることである。鹿児島県のこのような取り組みの弾み車になったのは2003年の産業観光フォーラム(鹿児島)であったし、鹿児島大学を中心とする学術研究の支援が大きな意味を有していることも強調しておきたい¹⁵⁾。

次に、長崎の沖合に浮かぶ小島でその姿から軍艦島と呼ばれる端島の動きを紹介しなければならぬ。ここは、1870年に天草出身の小山秀が端島砒を創業して以来、1974年の閉山に至るまで1世紀にわたり地下の石炭を掘り続けてきた炭鉱で、最盛期には5000人以上の人が暮らした島である。閉山後、無人島となってきた島であるが、近年、産業遺産としての価値が発見され、NPO法人「軍艦島を世界遺産にする会」が結成され、坂本道徳理事長を中心に活発な取り組みを行っているところである。長崎県は、観光資源の開発と保存に熱心な県であるが、後述の産業観光についてもいち早く取り組み、パンフレットを作成するとともにホームページもたちあげ、新しい観光ルートの開発にも力をいれている。

大牟田や志免についてはすでに言及してきたところであるが、最近の一大ニュースは志免立

坑櫓保存が決定したことである。これは関係者のねばり強い運動の成果である。

このような中、いま九州全体のネットワーク化が課題となっているが、2005年はその出発点ともなる年であった。

まず、鹿児島県が音頭をとり、長崎県と佐賀県に働きかけ、7月15日に鹿児島市で「九州近代化産業遺産シンポジウム」を開き、「かごしま宣言」を採択し、九州が一体となった保存活用を推進することをうたった。続いて、軍艦島を世界遺産にする会が中心となって九州伝承遺産シンポジウムが昨年8月21日に長崎で開かれた。このシンポは短期の準備とすることもあり参加者は多くはなかったが、質的にはたいへん大きな意味を持つ企画であった。

4 熊本の産業遺産の現状

これまで、世界・日本・九州の動きを簡単に整理してきたことから分かるように、いま産業遺産をめぐるでは大きな変化がみられる。そのような状況の下、熊本の動きはどうなっているのかについて見てみたい。

相次ぐ消失

この3年間をとりあげても、大切な熊本の産業遺産が相次いで姿を消した。

まず、最大のものは熊本駅前にあった月星化成熊本工場である。これはもともと明治27年に作られた熊本紡績の工場の原型を保持しつつ増築を繰り返しながら使い続けられてきた工場である。2002年6月に閉鎖され、その後、市民による保存運動もあって、熊本県も文化財としての理解を示し、保存活用の道が探られたのだが、現地で一部を保存し、新しくできる国の合同庁舎の設計に組み入れて欲しいとの要望がかなわず、残念ながら完全更地になった。わず

15) 長谷川 [2004] を参照。

かに二つの建物が移築・活用されることになったことが救いである¹⁶⁾。

つぎに大きなものとしては八代市にあった旧日本セメント八代工場である。九州初のセメント工場として1890(明治23)年に操業を開始し1世紀近くも稼働してきた工場であったが、1980(昭和55)年の閉鎖後25年近く放置されていた。だが、2004年に広島市に本部のある大規模小売店のイズミが太平洋セメントから借地してショッピングセンターを建設することになり、歴史ある工場施設も全て解体されてしまった。わずかに、3台の工作機械を熊本学園大が譲り受け、同大の産業資料館に展示しているだけである¹⁷⁾。

さらに、2005年秋の熊本駅機関車の消滅もまことに残念なことであった。この機関車庫は1914(大正3)年にできたもので、蒸気機関車時代から90年以上も用いられてきただけに時の重みをずっと感じさせたものであり、新幹線工事に伴い解体されてしまったのであるが、これも新しい駅舎の設計に組み入れることはできなかったであろうか。熊本駅に関連して、動く産業遺産であったSLあそBOYがボイラー老化に伴い引退したのも残念なことであった。

このような中、明るいニュースもいくつかある。まず、熊本での取り組みが産業考古学会により表彰されたことである。旧月星化成熊本工場の移築活用での貢献が認められ、学校法人熊本学園ならびに旧鐘紡熊本工場病院の移築活用グループが功労者表彰を受けた。同時に、九州で最後に運行した路線ボンネットバス(いすゞBXD30型)を山江村が保存復活し、有効に活用していることが評価され、同バスが産業考古学会推薦産業遺産に選定された。ともに2005年5月14日(土)に、東京都立航空高専で開催された同学会総会で表彰された。

また、九州新幹線の工事に伴い解体が決まったJR上熊本駅舎に関して、市民が主体となった保存運動が起こり、結果的に主要部分が移築され市電上熊本駅の電停の建物として活用されることになったことも、全国的に見ても注目すべき成果であると言える。

現況

集成館を有する鹿児島、近代日本の造船業を切り開いた長崎、鉄と石炭で栄えた北九州。これらに比べると熊本は農業県のイメージが強く、見るべき産業遺産はないように思われてきた。それだからこそ、先に見たような産業遺産が次々に取り壊されてきたのに世論も無関心であったのであろう。

本当にそうであろうか。実は、熊本も産業遺産が豊かに存在する県なのだ。国指定重要文化財となっているものだけで、通潤橋や万田抗、三角西港、熊大工学部資料館など多数存在する。熊本は産業遺産が豊富に残る県なのである。試みにこれらを大づかみで分類すると以下のようになる。

1 農林水産関係

農業：稲作(棚田)、養蚕業など

林業：植林(旧藩木を含む)など

水産業：漁船、漁具、養殖施設など

治水：幸野溝、百太郎溝、南阿蘇の用水路群、元禄・嘉永井手、鼻繰井手など

干拓施設：玉名干拓施設、不知火海干拓施設など

2 鉱工業関係

石炭：三池炭鉱万田坑、魚貫坑、烏帽子坑など

石灰石：大築島など

陶石：天草陶石

醸造業：熊本酒造研究所、瑞鷹酒造、千代の園酒造、山村酒造、通潤酒造、浜田醤油など

手工業：鍛冶、陶磁器、象眼など

工業：旧三菱健軍工場、八代・水俣の工場群など

16) この経緯については、磯田桂史 [2000] ならびに幸田 [2004] を参照。

17) 同工場にあった建造物については、磯田節子他 [2004] を参照。また、修理工場の工作機械については、幸田 [2005] を参照。

3 商業・サービス業

銀行業：旧第一銀行熊本支店，旧井芹銀行など
興行施設：八千代座など
倉庫業：川尻の藩蔵など

4 インフラ関係

眼鏡橋：霊台橋，通潤橋など
近代橋梁：立野橋梁，第一白川橋梁など
港湾施設：三角西港，川尻船着場，玉名の俵ころがしなど
鉄道施設：肥薩線，人吉駅機関車庫など
水道：轟泉水道など
発電所：九州電力黒川第一発電所，チッソ白川発電所など

5 その他

学校：旧制第五高等学校建物，旧制熊本工業学校建物など
宗教：崎津教会，大江教会，手取教会

年々、産業遺産は減っていくが、熊本だけではなく九州全体の遺産として、次世代に伝えたい遺産がこのように多々存在するのである。

特徴と可能性

以上に見てきた熊本の産業遺産の特徴を整理すると以下のとおりである。

第1に、意外にも熊本には多様な産業遺産が実にバランス良く存在するという点である。ひとつの目安として、砂田氏の『九州遺産』で取り上げられている九州遺産101を県別に分類すると以下ようになる。福岡県22，長崎県26，佐賀県6，大分県16，熊本県19，宮崎県9，鹿児島県9。合計が107になるのは、三池炭鉱や肥薩線，筑後川昇降橋など複数の県にまたがる遺産があるからである。熊本県19という数字は決して少ない数ではなく福岡に迫る数である。ただし、本書が出てわずか半年もたたないうちに、熊本駅機関車庫とあそBOYで親しまれた蒸気機関車が消えたので今は17となってしまった。

第2に、産業遺産を大きく2つ、「官の系譜」

と「民の系譜」に分けた時、地方官庁都市、文教都市としてのイメージが強い熊本市において、前者についての遺産が多いことはもちろんであるが、とくに郡部において後者に属する立派な産業遺産がよく残っていることである。「官の系譜」の代表としては三角西港や旧制五高や熊大工学部資料館，鉄道施設などをあげることができる。「民の系譜」としては通潤橋や霊台橋，用水施設などをあげることができる。

「民の系譜」をたどる時、そこに横井小楠＝実学党の影響を見いだすことができるのが、熊本の特徴と言えよう。一例として、あまり知られていないが、熊本県の中央部にある「岩野用水」を紹介しておく。これは、細川時代の末期の中山手永（現在の美里町西部）において、中山惣庄屋の矢島忠左衛門のリーダーシップの下に、地元の石工や農民が労力を提供して行われた工事である¹⁸⁾。矢島忠左衛門の息子、矢島源助（直方）も、「父の総庄屋に対する助役格の代役をつとめて居る中に自然に水利道路の道に通達したものでせう、江戸に出仕した時も民部省の堤防橋梁の方へ務めました¹⁹⁾」と言われるように、父から治水工事について学んでいる。この矢島源助は、竹崎茶堂，徳富一敬と並んで、横井小楠の三高弟と呼ばれ、徳富一敬に次いで入門したのは1840年代半ばのことで、ちょうど岩野用水が出来た頃にあたる。

第3に、とくに熊本が全国に誇れる産業遺産をあげるとすれば、他のどこにもないユニークな鼻線り井手や緑川流域石橋群など加藤・細川時代の治水・治山遺産がよく残っていることである。2005年3月には、伊東孝氏を招き「全国石橋サミット」が山都町で開催されているが、総じて、熊本の産業遺産をくくるキーワードは水と緑と石であるといつてよいであろう。稲作文化は植林という形で緑を増やし、そこに蓄えられた水を石を用いて制御し利用して

18) 吉村 [2005]，長井 [2005] を参照。

19) 基督教婦人矯風会編 [1923]，37頁。

きた歴史が豊富なヘリテージという形で残っているのが熊本なのである。

5 産業観光の広がり

産業観光とは

産業観光とは、JR 東海相談役の須田寛氏が提唱され、近年急速に広がった言葉である。これは、「歴史的文化的価値ある産業遺産、工場・工房を観光資源とする観光」²⁰⁾ のことで、本来の産業施設としての役割を終えた産業遺産だけでなく、現役の最先端工場までを含む広い意味の観光のことを指す。

須田氏の提唱を受け、もともと明治村に代表されるように歴史遺産に関心を示す土壌を持った中京の経済界を中心に急速に産業観光への理解が広がっていった。産業観光に関する本も相次いで出版され、全国的規模で以下のような産業観光フォーラムが開かれたきた。

- ・第1回全国産業観光サミット 名古屋 2001年
- ・第2回全国産業観光フォーラム 浜松 2002年
- ・第3回全国産業観光フォーラム in 鹿児島 2003
- ・第4回全国産業観光フォーラム in さっぽろ 2005
- ・第5回全国産業観光フォーラム in はちのへ 2005

2005年は、二つのフォーラムが開かれたということに加え、愛知万博において「産業観光国際フォーラム」が開かれたということで、産業観光にとって画期的な年であった。

九州では、鹿児島や北九州、長崎といったところがいち早く産業観光の可能性に注目して、各種の事業に取り組んできた。たとえばホームページを使った広報状況を見ても2006年1月現在で、「長崎県産業観光情報サイト ながさき見・学・知」や「北九州市役所観光案内 - 産業観光」などの積極的な取り組みが見られる。

九州は、製鉄所や造船所、自動車工場など大

規模な現役工場が存在することに加え、炭鉱を含め各種の産業遺産が豊富に存在するのであるから、まさに九州こそ「産業観光アイランド」と呼ぶにふさわしいところと言えよう。九州全体の産業観光の動きについては、2005年秋の朝日新聞西部本社の特集記事「根付くか『産業観光』」が手際よく整理している²¹⁾。ここでは、臼杵の造船所の進水式ツアーと軍艦島クルーズをとくに大きく取り上げ、九州・山口の産業観光施設の例として、熊本のサントリー九州工場と万田坑を含め各県で2カ所を紹介している。そして、中部から始まった「産業観光」を九州で広げる火付け役になったのが、砂田光紀氏の『九州遺産』と述べ、今後これがブレイクするかどうかは、「受け入れ側の体制作りと、ネットワーク化」によると書かれている。

それにしても、他県に比して熊本の遅れが目立つ。巨大船をつくる造船所からナノ技術を駆使する半導体工場まで立地し、アルコール飲料工場も、ビール・酒(日本の南限)・焼酎(球磨焼酎)とバラエティに富む見学が可能な点をもっとアピールする必要がある。そういう中で、山鹿温泉や黒川温泉とも組み合わせた観光ツアーや修学旅行という形での万田坑への観光客が2005年度より急増していることに注目しなければならない²²⁾。

産業遺産の活用

以上見てきたように、熊本にも多様な産業遺産が存在する。最後にこれらの今後の可能性について整理しておきたい。

まず、近年重視されるようになってきた地域の景観にとって、歴史の重みを蓄積した建物や土木構築物は不可欠の要素をなすことである。熊本でもっともこの点を重視したまちづくりを積極的に実践しているのは山鹿市であろう。そ

20) 須田他 [2002], 16頁。

21) 『朝日新聞』(西部本社版)2005年10月9日。

22) 『熊本日日新聞』2005年12月17日。

の中心の豊前街道は、菊池川の惣門から始まり古い醸造工場や大正時代の銀行建物、製糸工場事務所、さらに重要文化財の八千代座など地域の発展を体現している建物が豊富に残ることで独特の魅力を醸し出している。

第2に、産業遺産は次世代への伝承・教育という観点から、総合的学習や体験型学習という点で格好の教育の場を提供するという点である。例えば、八代市東陽村町の石匠館にいけば、アーチ型の石橋の仕組みを自ら組み立てることで実感的に学ぶことができる。

第3に、観光資源という点で近年大きな脚光を浴びていることである。ヘリテージツーリズムという言葉が次第に耳に馴染む言葉になってきているのは喜ばしいことである²³⁾。現役工場の見学も含め、まさに産業観光を可能にするモノこそ先祖が築いてきた産業遺産なのである。

古いモノを活用し新しいモノと組み合わせることによって、魅力的な新たな都市空間・農村空間が生まれる可能性を熊本は秘めている。九州の産業遺産の中で熊本の独自性を出すとすれば、よく残っている土木遺産や建築遺産に加え、横井小楠の実学堂の流れをくみ、かつては西日本有数のシルク県として知られた熊本として、養蚕・製糸遺産の保存に力を入れる必要がある。それは製糸関係の建物や設備だけに留まるものではない。いま、熊本には20戸ほどの養蚕農家が残っているが、九州では熊本のみということを強く意識し、生きた産業遺産として保存に努力すべきである。

その際、産業遺産を観光地として発信するにあたり大切なことは、素晴らしい遺産があるから人が訪ねて来るだろうというような発信側の

思い入れだけで進めないことである。ここに必要なのは佐藤喜子光氏のいう「新しいdestination・マーケティング」の発想である²⁴⁾。大都市圏の人々が何を求めているかを年代別・階層別に想定し、その人たちにふさわしい観光資源を提示したりあらたに発掘したりすることが必要なのである。

6 おわりに

世界的に見ると、既に見たように近年、世界遺産に認定される産業遺産が増えている。例えば、2001年度にはイギリスで4つの世界遺産が認められたがそのうち3つが工場であった。その中には、ロバート・オーウェンが人道的な経営を行ったことで著名なスコットランドのニューラナーク紡績工場も含まれる。

このような観点から見た場合、九州の産業遺産はどのような可能性を有しているのだろうか。興味深いのが、TICCIH 事務局長、S. B. スミス氏による2002年秋の九州レポートである。氏は福岡と長崎、鹿児島産業遺産を見学した後、「欧米以外でこれだけ充実した産業遺産が保存されているところはない」と指摘し、各県バラバラではなく一体となって取り組み「世界遺産の可能性がある」と述べている。スミス事務局長は2005年7月に大牟田で、「大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ」によって開催された「九州産炭地フォーラム」でも講演し、「世界遺産への第一歩として、九州各地の素晴らしい産業遺産をネットワーク化することが大切」と述べている²⁵⁾。

世界遺産の登録申請について次のような指摘

23) ヘリテージツーリズムは、日本交通公社編 [2004] でも大きく取り上げられている。

24) 「まず、これらのテーマに触発されると予想される客層(細分化標的市場)を想定し、それにマッチした具体的な観光行動のシナリオを提案し、実行方法を教示することによって市場を創出していく。一方同時に、想定される観光行動のシナリオの舞台を求めて観光資源リサーチを進める。そして、現在は埋もれている潜在的な観光資源も含めて、これらのテーマに適應できる可能性のある観光資源の発掘を提案し、具体的な受け皿(観光商品)を観光地側と共同開発することになる」(佐藤 [2003], 25頁)。さらに、コトラ他 [2003] の第18章「destinationマーケティング」を参照。

25) 熊本日日新聞、2005年7月14日。また、スミス氏の「九州の産業遺産を世界遺産に」という論説が読売

がある。「一件の登録申請について、地理的に離れているいくつかの文化遺産または自然遺産を、ひとつにまとめて提示することができる」が、その条件は、「同じ歴史文化圏に属すること」「地帯特有の同型遺産に属すること」とある²⁶⁾。九州の産業遺産はまさにこの条件を満たすものだとと言える。

このように、世界遺産も視野にいれることができるほど、九州の産業遺産は大きな可能性を秘めた「遺産」であることが了解できると思うが、その可能性を発揮していくためにはいくつかの課題が存在する。

第1に、多くの人々の参加と協力の仕組みを築き上げなければならない。産業遺産は多くの場合、不動産として存在し地域と密接に関係しているため、専門家・半専門家・素人の力を結集して調査し保存・活用の道を探る必要がある。産業遺産の保存・活用をめぐるには、必ずや市民・住民(NPOを含む)、研究者、国・自治体、企業・経済界、この4者の連携が必要になってくる次第である。

産業遺産を所有する企業は、古い建物・設備の文化的価値を認識し、それを活かし活用することは企業の社会的責任(CSR)の一つであること、結果的にそれは企業のブランドイメージにつながることを認識する必要がある。また、自治体に譲渡される事例が増えてきたことも新しい流れを加速している。その際、ともすればお荷物を背負ったと考える自治体もあるが、すばらしい地域遺産を受け取ったことをまず認識し、その保存・活用については民間の知恵、創意を引き出すことが重要である。また、世論形成という面では、会社員、公務員、教員、学生、

主婦など無関係とと思っている人への広報活動を通じ、関心を呼び起こすことが必要であろう。

学術的な面でも「学際」的な分野であり、様々な学問分野の協力が必要である。工学(建築学、土木工学、都市工学、景観工学など)、歴史学(経済史、経営史、地域史、技術史など)、環境学、文学、観光学、芸術学、それに近年はマネジメントやマーケティングも必要となっている。豊かな可能性を秘めた面白い分野であり、それぞれの地域において多くの研究者と地域住民の英知を結集する仕組みを考え出さねければならない。幸い、全国には素晴らしい企業家や企業があって、先駆事例に学ぶことも大切である。

第2に、経済的に成り立つ仕組みの構築である²⁷⁾。NPOを含めたマネジメントならびにマーケティングの工夫がまず必要である。また、よほど大規模な産業遺産の他は、個々の産業遺産だけでは観光客を引きつける力が弱いので、他との連携が重要になる。例えば、地域の多様な産業遺産のネットワークや他の観光資源とのネットワークが考えられる。熊本は阿蘇や天草という二つもの雄大な国立公園を持っているし、黒川温泉をはじめ多数の温泉に恵まれているのでそれらとの連携が必要なのは言うまでもないが、意外に見落とされがちなのが近代建築との連携である。すなわち、熊本はアートポリスという財産ももっている。これとのコンビネーションも課題だ。さらに、熊本の農産物・林産物・海産物との連携や、天草の教会や有明海沿岸の古墳群との連携などいろいろなことが考えられる。

観光について次のような指摘がある。すなわち、「そもそも観光とは地域にある自然や歴史

新聞(夕刊)2005年8月2日に掲載された。さらに、TICCIHの意見も踏まえ世界遺産の選定を行う権限を持つICOMOS名誉会員のヘンリー・クリアー氏は、2005年6月に鹿児島に招かれたとき「九州各県が連携して歴史的価値の掘り起こしに取り組めば、優れた点が見えてくるだろう」と述べている(南日本新聞社[2005], 232頁)。

26) オドルリ他[2005], 53頁。

27) この点は、昨年8月21日に長崎で開かれた九州伝承遺産シンポジウムで、三藤利雄氏のコメントに教示された。

だけでなく、地域にある産業を総合的に提供するという意味で、地域産業を総合化したものだということができる。つまり、観光はそれぞれの産業のかけ算の六次産業といえよう²⁸⁾。このような観点からすると熊本は実に豊かな観光資源を有する県と言えよう。

最後に、九州の産業遺産の保存・活用にあたって、各県レベルだけではなく、九州全体の関係者・関係組織のネットワークが不可欠である。九州の中央部に位置する熊本は、あと5年後に迫った九州新幹線の博多・熊本間の開業を前に、いたずらに危機感を抱くことなく、陸路・海路の地の利を活かして積極的に様々な分野で九州のネットワーク化に取り組む必要があるが、産業遺産のネットワークもその中に含まれるのである²⁹⁾。

まことに、産業遺産の保存・活用は熊本のみならず九州全体の地域活性化にとって戦略的に重要な課題であると言えよう。

参考文献一覧

1. 書籍・論文

- 青柳健二 [2002], 『日本の棚田百選』 小学館。
 阿曾村孝雄 [2005], 『日本全国近代歴史遺産を歩く』 講談社+ 新書。
 磯田桂史 [2001], 『月星化成(株) 熊本工場 旧熊本紡績に関する調査報告』 『産業考古学』 第102号。
 磯田節子 他 [2004], 『れんが造の機械修理工場について 旧日本セメント八代工場の産業遺産(その1)』 『日本建築学会研究報告九州支部』 第43号。
 伊東孝 [2000], 『日本の近代化遺産 新しい文化財と地域の活性化』 岩波新書。
 オドルリ, D・R 他(水嶋英治訳) [2005], 『世界遺産』 文庫クセジュ。

- 大熊孝 [2004], 『技術にも自治がある 治水技術の伝統と近代』 農文協。
 加藤康子 [1999], 『産業遺産「地域と市民の歴史」への旅』 日本経済新聞社。
 木元富夫 [2004], 『産業化の歴史と景観』 見洋書房。
 基督教婦人矯風会編 [1923], 『矢島楫子伝』 婦人新報社。
 久米雅章・松永明敏・川寄兼孝 『鹿児島近代社会運動史』 南方新社, 2005年。
 幸田亮一 [2004], 『熊本における『産業革命』と産業遺産の可能性 旧熊本紡績赤れんが工場の熊本学園大学への移築に際して』 『熊本学園大学産業経営研究所』 第23号。
 幸田亮一 [2005], 『1895(明治28)年国友鉄工製の平削盤 熊本学園大学産業資料館に保存・展示』 『産業考古学』 第114号。
 コトラー, フィリップ他 [2003], 『コトラーのホスピタリティ&ツーリズム・マーケティング』 ピアソン・エデュケーション。
 後藤恵之輔・坂本道徳 [2005], 『軍艦島の遺産』 長崎新聞社。
 佐藤喜子光 [2003], 『めざせカリスマ観光士』 同友館。
 産業考古学会編 [1994/95], 『日本の産業遺産 300選 1~3』 同文館出版。
 四国通商産業局監修 [2000], 『来て見て四国 ものづくり』 愛媛新聞社。
 須田寛 [2005], 『産業観光読本』 交通新聞社。
 須田寛・徳田耕一・安村克己 [2002], 『新・産業観光論』 すばる書房。
 砂田光紀 [2005], 『九州遺産』 弦書房。
 園田頼孝 [1983], 『肥後熊本の土木』 熊本日日新聞情報文化センター。
 中部産業遺産研究会編 [2000], 『ものづくり再発見 中部の産業遺産探訪』 アグネ技術センター。
 中日新聞経済部編 [1997], 『わくわくモノづくりランド中部 産業観光ガイド』 中日新聞本社。

28) 日本交通公社 [2004], 50頁。

29) 例えば、明治期鹿児島島の工業化にあたって、鹿児島は養蚕技術を熊本から学んだことが最近の研究(久米他 [2005], 45-51頁を参照)で明らかになってきているが、このような観点からの調査・研究は今後さらに必要になるだろう。

東京国立文化財研究所監修 [1999], 『産業遺産 未来につなぐ人類の技』大河出版。

富山和子 [1974], 『水と緑と土』中公新書。

富山和子 [1993], 『水の旅』文春文庫。

富山和子 [2005], 『日本の風景を読む』NTT 出版。

長井勲 [2005], 「中央町に残る近世期開削の用水群について」『下益城郡美里町旧中央町地区金石文遺物調査報告書』熊本大学文学部日本史研究室。

中村弘之 [2005], 『熊本市電が走る街 今昔』JTB パブリッシング。

中村良夫 [1982], 『風景学入門』中公新書。

南日本新聞社編 [2005], 『かごしま近代化遺産』南日本新聞社。

日本交通公社編 [2004], 『観光読本 (第 2 版)』東洋経済新報社。

日本ナショナルトラスト監修 [2001], 『日本近代化遺産を歩く』JTB パブリッシング。

長谷川雅康 [2004], 『薩摩のものづくり研究: 薩摩藩集成館事業における反射炉・建築・水車動力・工作機械・紡績技術の総合的研究』(平成 14~15 年度科学研究費補助金研究成果報告書)。

古田陽久監修 [2005], 『世界遺産ガイド 産業遺産編』シンクタンクせとうち総合研究機構。

馬淵浩一 [1999], 『日本の近代技術はこうして生まれた 産業遺産をヒントに考える』玉川大学出版部。

前田清志 他編 [2000], 『日本の産業遺産 産業考古学研究 2』玉川大学出版部。

増田彰久 [2000], 『写真集成 日本の近代化遺産 全三巻』日本図書センター。

増田彰久 [2001], 『近代化遺産を歩く』中公新書。

松原隆一郎 [2002], 『失われた景観』PHP 新書。

矢作弘 [2004], 『産業遺産とまちづくり』学芸出版社。

山崎俊雄 他編 [1986], 『日本の産業遺産 産業考古学研究』玉川大学出版部。

吉村豊雄 [2005], 「近世水利事業の歴史的変遷をめ

くって」『下益城郡美里町旧中央町地区金石文遺物調査報告書』熊本大学文学部日本史研究室。

読売新聞文化部 [2003], 『近代化遺産ろまん紀行 (東日本編・西日本編)』読売新聞社。

和辻哲郎 [1979], 『風土』岩波文庫 [原著, 1935 年]。

2. 調査報告書

福岡県教育委員会 [1993], 『福岡県の近代化遺産』福岡県教育委員会。

大分県教育委員会 [1994], 『大分県の近代化遺産』大分県教育委員会。

長崎県教育委員会 [1998], 『長崎県の近代化遺産』長崎県教育委員会。

熊本県教育委員会 [1999], 『熊本県の近代化遺産』熊本県教育委員会。

佐賀県教育委員会 [2002], 『佐賀県の近代化遺産』佐賀県教育委員会。

鹿児島県教育委員会 [2004], 『鹿児島県の近代化遺産』鹿児島県教育委員会。

沖縄県教育委員会 [2004], 『沖縄県近代化遺産 (建造物等) 総合調査報告書』沖縄県教育委員会。

3. 雑誌特集

『太陽』「特集: 産業遺産の旅」No. 469, 1999 年 11 月。

『別冊歴史読本 近代を創った 77 人 近代化遺産とバイオニア』新人物往来社, 2001 年。

『男の隠れ家』「身近な異空間 日本の近代化遺産」2003 年 6 月号。

『日経地域情報』「特集 産業観光 “離陸” の条件」No. 431 号, 2004 年 1 月。

『るるぶ情報版 中部 50』「産業観光に行こう」2005 年 2 月。

『文化庁月報』「特集: THE・近代化遺産」No.444, 2005 年 9 月号。

